

母国を離れ海外で健やかに活躍するために【後編】

2025年4月号掲載の【前編】に続き、現地入りした後に発生した各種トラブルへの対応事例を紹介する。



インターナショナル SOS ジャパン(株) メディカルディレクター
医師 湯井 真紀子

【前編(4月号)要旨】

海外勤務者は渡航先で直面する様々な健康リスクに備えなければならない。
狂犬病のほか、麻疹(ましん)、マラリア、デング熱、ジカ熱といった感染症など、予防接種を完了して渡航するようにしたい。
発展途上国においては大気質・水・食品の安全がいまだ脆弱(ぜいじゃく)な点に留意し慎重に行動する必要がある。
社会環境や生活習慣の変化によって新たに生活習慣病を発症したり、持病が悪化することも。
海外派遣による精神面への負荷も渡航先を問わず、気を付けなければならない。飲酒などによる事故や外傷は常に潜む健康リスクと言えよう。

現地入り後

たとえ先進国への短期出張であっても、現地では体調を崩した際には大きな不安を感じるだろう。手持ちの薬で対応できるか、受診すべきか、いつすべきか、どの医療機関が適切か。そのような場合に、24時間いつでも相談できる医療従事者がいれば心強い。我々が1本の電話やメールを受けた結果、医療のアドバイスにより解決することもあれば、幾つもの国境を越えて母国への帰還を提供することもある。

対応事例

ケース①: 1歳児、米国駐在者の帯同家族。
現地時間の金曜日夜に「生来健康だったが、高熱が2日間ほど下がらず、夜間でも受診すべきか」との相談を親御さんから受けた。発熱以外の症状はほぼなく、意外にも食欲は落ちず元気

にしているという経過を伺う限り、この年齢の小児に特有の一般的なウイルス感染症(突発性発疹)と推察。そろそろ解熱し、その後全身に発疹が出現すると説明の上、元気な様子に変化がない限り、小児用解熱剤を適宜内服しながら、ご家庭で経過観察することを提案した結果、当該経過をたどり自然に回復した。

ケース②: 60代男性、アフリカ・モザンビークの単身駐在者。勤務先担当者から「ホテル内で意識を失っているところを発見され、現地医療機関に搬送された」との連絡あり。当社の現地センターが同病院医師と電話協議した結果、「重症マラリアで多臓器の機能不全を来しているため、最近医療好適地である隣の南アフリカへ可及的速やかに搬送すべき状態」と確認。直ちに緊急医療専用機と搬送医療チームを稼働させ、南アフリカでの受け入れと高次医療機関ICUベッドを確保する一方、同病院医師に応急治療継続を依頼。発症から2日目に南アフリカの病院へ入院後、集中治療は数週間に及んだ。隔日の人工透析の合間を縫って、医師付き添いで日本帰国となった。

ケース③: 50代男性、中国の都市部の駐在者。
週末の夜間に電話にて「30分ほど前にみぞおちに強い痛みがあり、10分程度持続した後、消失したが手足が冷たい感覚は残存。過去に狭